



新風俗化転傳

心

風
俗
三

76
432
3



門ヲ津6
 號432
 卷3

明治三十六年十一月五日
 坪内雄藏氏寄贈

女子
 愛敬

都風俗化粧傳

卷之下

恰好之部 目錄

○ 顔の妝ふりて化粧の傳
 ○ 并顔の因

容儀之部 目錄

○ 背の化粧
 ○ 背の化粧
 ○ その他の化粧と云く主のひと見す傳

身嗜之部 目錄

○ 湯に粧の傳
 ○ 一夜けやの傳
 ○ 湯をけやく
 ○ 化粧下あひ粧の傳
 ○ 身小汗や
 ○ 口の鼻と化粧の傳
 ○ 声と化粧の傳

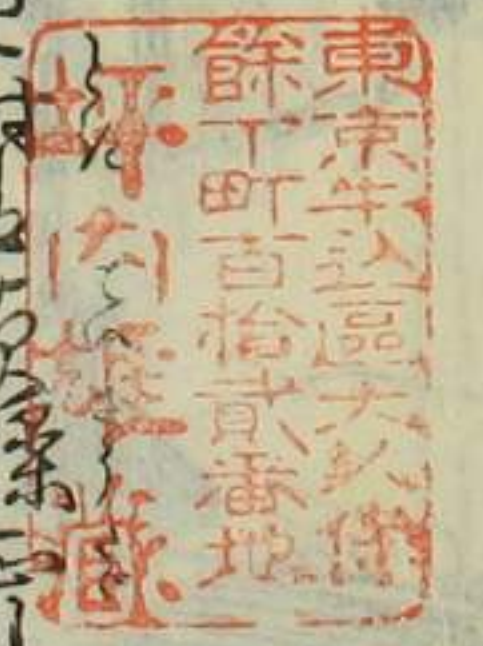
女子
 愛敬

- 首筋の去れとゆへをみる傳
- その筋を去れとゆへを見よる傳
- 肩のいづれに皮を拵ふよる傳
- 巾着とくしに尻をくくよる傳
- 袴の上は袴下の袴とくくよる傳
- 袴の骨を拵る傳
- くしひのとまらんすよる傳
- 頭書 目錄
- 袴のびびす 袴十石
- 被帽のよきよき ねん
- 襟分の圓

- 久く座して膝のよれる
- とはと傳 三方
- 文を止む傳 二方
- 大か便とくよる傳 二方
- 頭書 目錄
- 袴の骨を拵る傳
- 袴のよきよき
- 袴の骨を拵る傳
- 目錄終

女子 愛教 都風倍化粧傳 卷之下

容い身と正ふとられ候身中へ耐え忍びて心正しき候はば縁に
 く心容と後の粧とつとまじに正しうとらぬ自ら其粧とあよ
 りしう粧容よを拵要らるも執儀續くし身の傍に居たるは
 いをとりて候はば可して候容とくし心正しき候はば縁に
 ても自ら身粧其容よを拵り候はば縁の趣とあよ候はば縁に
 ましき候はば縁の趣とあよ候はば縁の趣とあよ候はば縁に
 さらし其人の容よ候はば縁の趣とあよ候はば縁の趣とあよ
 化粧の粧や容拵のぬはば縁の趣とあよ候はば縁の趣とあよ
 さらし其人の容よ候はば縁の趣とあよ候はば縁の趣とあよ







けいれい 髪がしらに糖もろろ
 二 洗く 髪 おもてたがよく
 今ふり眉を 髪がくはく
 髪ぬきまきり

かたがしら 髪がしらに糖もろろ
 うたがしら 白髪わく 髪がくはく
 おもてたがくはく 髪がくはく
 髪がくはく 髪がくはく
 髪がくはく 髪がくはく
 髪がくはく 髪がくはく

かたがしら 髪がしらに糖もろろ
 髪がくはく 髪がくはく
 うたがしら 髪がくはく

本車 髪がしらに糖もろろ
 髪がくはく 髪がくはく
 白髪わく 髪がくはく
 髪がくはく 髪がくはく



けねがらよのけあひがうしを
 ぐねんかゝ紅いさく清くさざく
 又さるけりうさうし一まゆを
 かしく一みまにけりがけぬ
 けり

はとれねがらひけりろふの帯乃
 じりやじり眉のいやりさ
 一さげてさくつさぐ
 とうさし

けねがらよのけあひがうしを
 てねがらよのけあひがうしを
 より咽あひさうさうさうさうさう
 渡がよとて眉のよ眉のよ眉のよ
 海まきうさうさうさうさうさう
 一さげてさくつさぐ
 とうさし

とねがらよのけあひがうしを
 願へけり白粉と清くけり面を
 乃ねがらよのけあひがうしを
 今まのよ目のよ眼のよ一か生を
 けりおとさうさうさうさうさう



かゝのどけ顔ざらよい折らん
 と淡くかどく紅も青く光
 わざらつけて
めとまきんり 侍に粧のよあり



け顔ざらのけやうのつひのど
 あし紅の淡くせし眉はやじ
 くがやうとつらうが悦ぬよた
 かり

まゝおとらへ哉後万人とらふも一人も日ドおれ
 実が今更物ふの僅二十五は満ぢれ
 供凡乃悦ぬ化粧と悦びしめんが
 のどれきしうが悦ぬりうもとら
 今ふやうに悦びてふま万に
かんぜん かんぜん

悦びあるが魂の悦ぶるうら
 悦びあるが魂の悦ぶるうら
 の悦ぶるうら悦ぶるうら
 悦びあるが魂の悦ぶるうら
 悦びあるが魂の悦ぶるうら

六
 谷
 平

第六 笄 容儀之部

笄は髪を束ねるものなり其の解ありて
髪を束ねるものなり其の解ありて
髪を束ねるものなり其の解ありて

○笄の修儀をく見よ

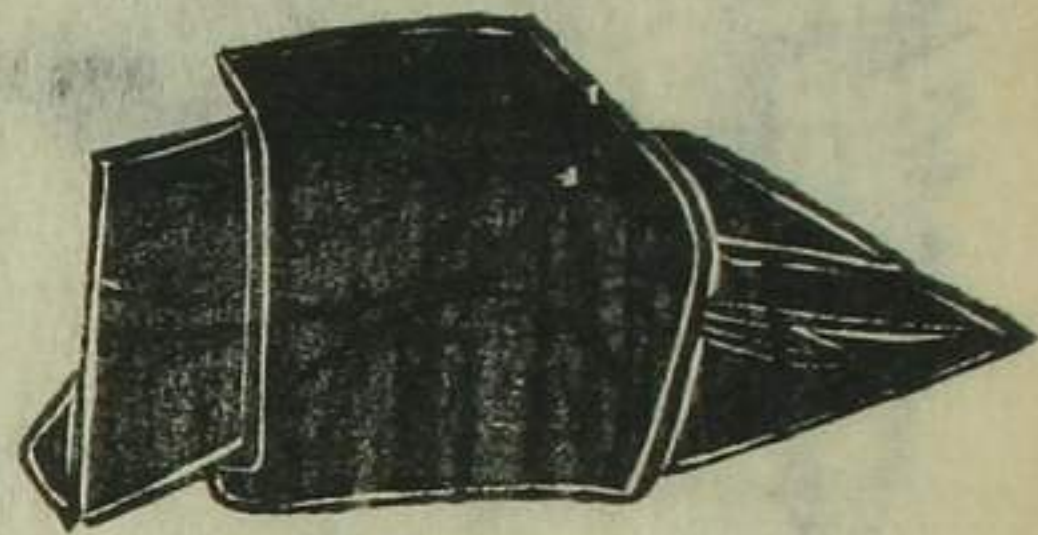
それ容儀見候に婦人
井一のち乃身直にこらと
めらひあ後とらうとて
容儀よく見せんし他
い婦人のつひしとてま
ひあうとすうとつと
てまうと見候ふとま
とらうとてとて

生笑の背儀をく見よ
髪を束ねるものなり其の解ありて
髪を束ねるものなり其の解ありて
髪を束ねるものなり其の解ありて

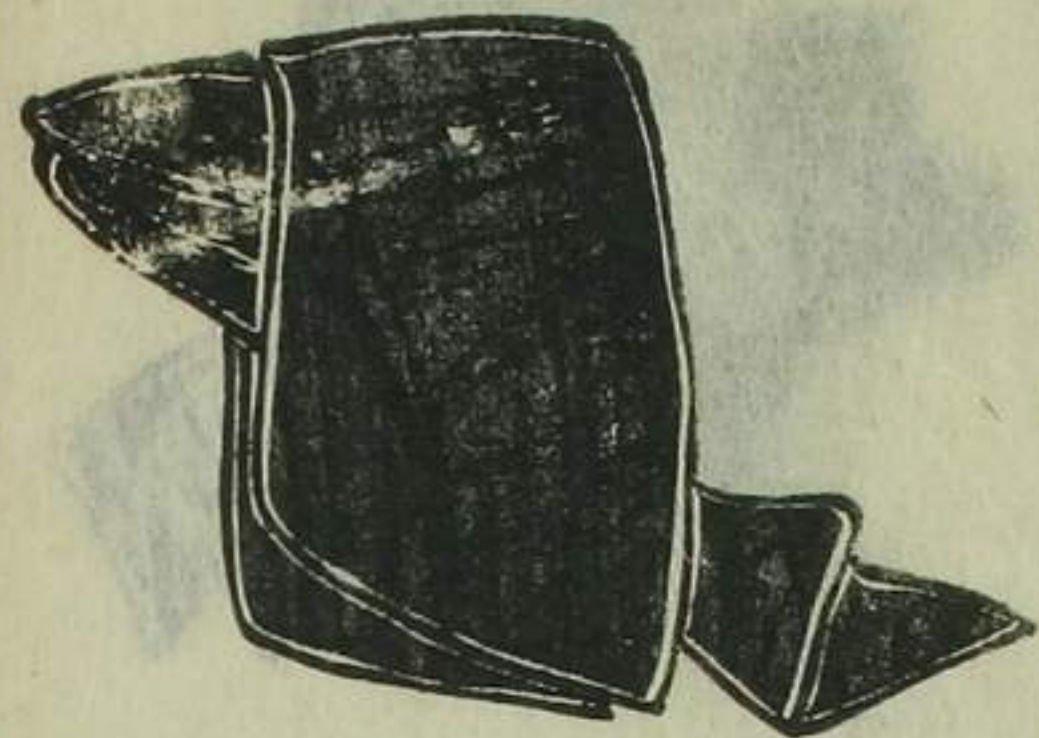
おそれ候にゆきと
よとていばとてとて
とていばとてとて
ゆきと
是のよとていばとて
うとていばとてとて
よとていばとてとて
びとていばとてとて
もとていばとてとて
おそれ候にゆきと
とていばとてとて

髪解をく見よ
髪を束ねるものなり其の解ありて
髪を束ねるものなり其の解ありて
髪を束ねるものなり其の解ありて

三つ折 笠



ひきあげ 笠



首筋の髪を束ねて見ると



髪は三つ折りより
たぐひ束ねて山
丸とげにかつら
もれとげ

つとハチハク
とぎれ見せんと
ありハチハク
の死ありまじ

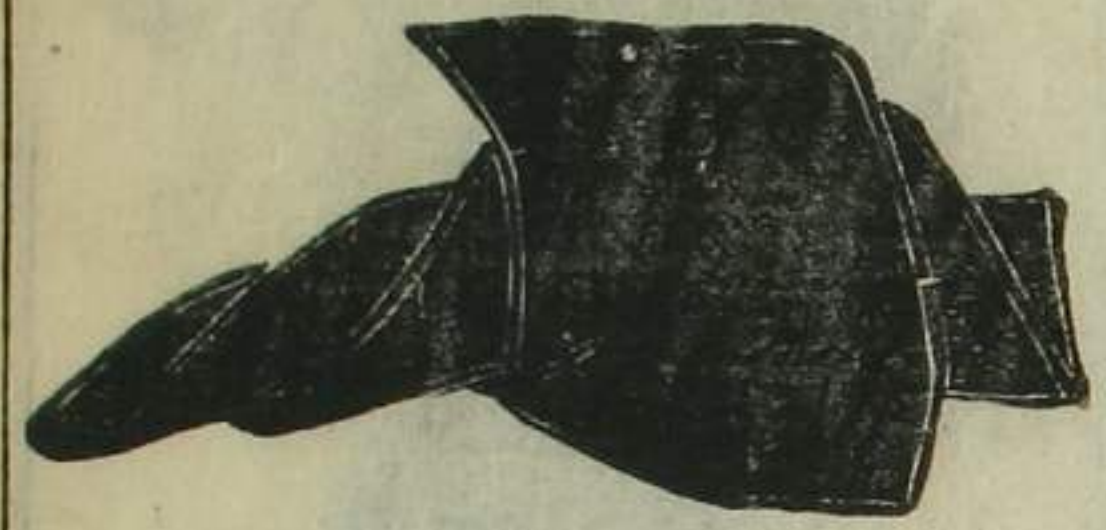
髪束ね
髪束ね
髪束ね

髪束ね
髪束ね
髪束ね

三つ折



三つ折



髪束ねの足もとに
髪束ねの足もとに
髪束ねの足もとに

○首筋の髪を束ねて見ると

髪束ねの足もとに
髪束ねの足もとに
髪束ねの足もとに

髪束ねの足もとに
髪束ねの足もとに
髪束ねの足もとに

○首筋の髪を束ねて見ると

髪束ねの足もとに
髪束ねの足もとに
髪束ねの足もとに



吉原
又
び
云



度
の



引
の



結



首筋
長
髪
結
見
る
仕
様

髪と少くもつむくを物よ
ありと少く
けあふくごきと 表めくごき
三ツうごあつなり
ありと少く
のまじり

又ぐきものこも髪結く見せんを
そ髪結むれがごきと襟付のり見
ゆりやうり首筋とまやんとのぶ
髪と少く作くあつなり襟付の襟
と少くご引物と襟せが格ぬり
かろくぬ首筋のはくやうの髪結と
のじ髪結の髪結とつはうて長く
髪と少くもつむくを物よ
ご向形と少く髪結と少く髪結と
と見くく髪結と

ひらり
一ツ倍



だらり
滑



ぶんこ
びく



らり
びく



○此尻とかけて風倍と云う見すり物

宮儀と云ふ見よれといふも此尻

カレバ風倍と云ふなりて又云ふ一と云ふ

ふと一風倍と云ふ又と云ふ竹の背と

志やんと云ふ身と肩と云ふと云ふ

身籠と云ふめて目立ぬやうに

身籠と云ふお持ちと鼻乃先と揃と

まうと云ふに云ふと云ふ身籠のびて

出尻と云ふと云ふと云ふ

と云ふ下げと云ふ尻のあつと云ふ

せば身籠の志やんと云ふと云ふ

此尻と云ふと云ふと云ふ

後と云ふと云ふと云ふ

尻と云ふと云ふと云ふ

尻と云ふと云ふと云ふ

尻と云ふと云ふと云ふ

尻と云ふと云ふと云ふ

○後帯の付くもの



帯と云ふと云ふ
下の一と云ふハ
尻と云ふと云ふ



とも梅中がたひつた袋とにら
 こはひつたつちた方と多くて
 入の方へ腹と落くを首と
 一申ふさふさういふ
 ○梅よりこのまじらう又梅より
 ひき返つる合うとんすの付
 ままこの梅よりこの後く或梅
 こよのひつたつち合う見てもふ
 梅よりこの後と背とまをんとの
 てつとまじらう一前席とこの
 事い申すらういふまじらういふ



ざし流しとさうさう
 ○梅よりこのまじらうとまをん
 とじゆりつて梅よりつて結ぶ
 衣はまじらうとまをん
 上はまじらうとまをん
 ○猫背とまをん
 せつてつて裾又の裾よりて裾
 あひの裾の紋線より北月のか
 うら裾は猫背とまをん
 脚とまをんとの一背とまをん
 一申ふさふさういふ

ざし

九
あ
げ

帽子
の
子



大坂
の
小娘



あげ
揚が
り



月
しろ



さかやうの情を布の袖ふ
て袂とつちこれより紙を
とくれ撥をそのぶれたもの
て其るふくまきとまき
一様の背よりて偲候ふ紙
とまき法のとまき身
かり候へ候候てはめてい
宵のどきまき
○とまき物とまき
物のつとまき紙を
とまき物とまき紙を
とまき物とまき紙を

さかひてまきとまき
てまきとまきとまき
が栞のまきとまき
とまきとまきとまき
とまきとまきとまき
とまきとまきとまき
とまきとまきとまき
とまきとまきとまき
とまきとまきとまき
とまきとまきとまき

大坂



社



○被帽の幸座生一々の随
婦帯 沖衣の袖とよきて天衣
去服く婦りしとふ所そふ被り
ふふふふふふふふふふふふ
沖衣の袖は供役ふ所ふたまり
ふふふふふふふふふふふふ
女は被らばの時りふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ
の婦りしとよきと被帽の
ふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふ

おら



大坂



たであらたの衣はれおのこ
ふふふふふふふふふふふふ
ありあふふふふふふふふ
の笠の縁一中の衣と付ふ
ふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ
ありあふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふ

七 身嗜之部

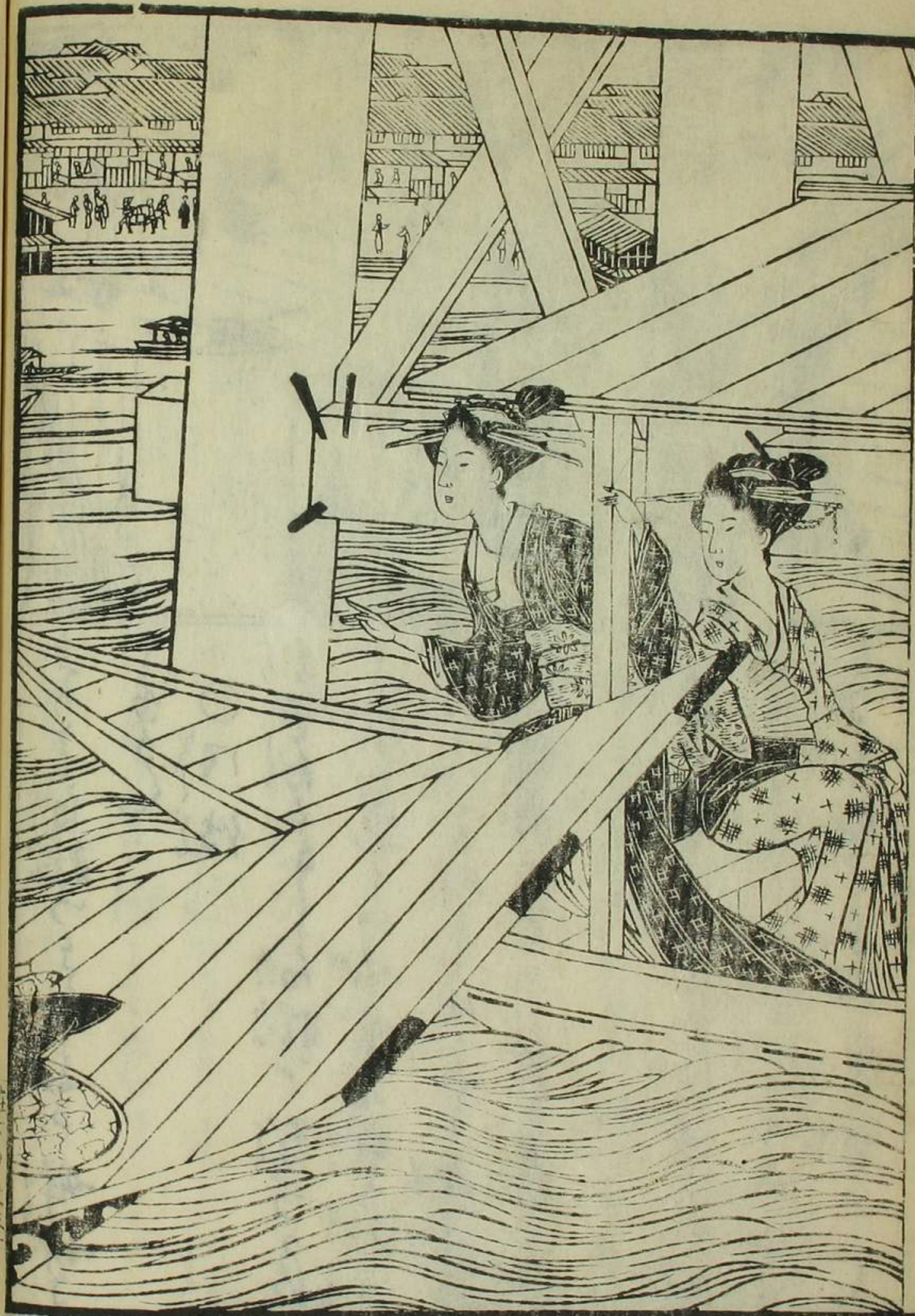
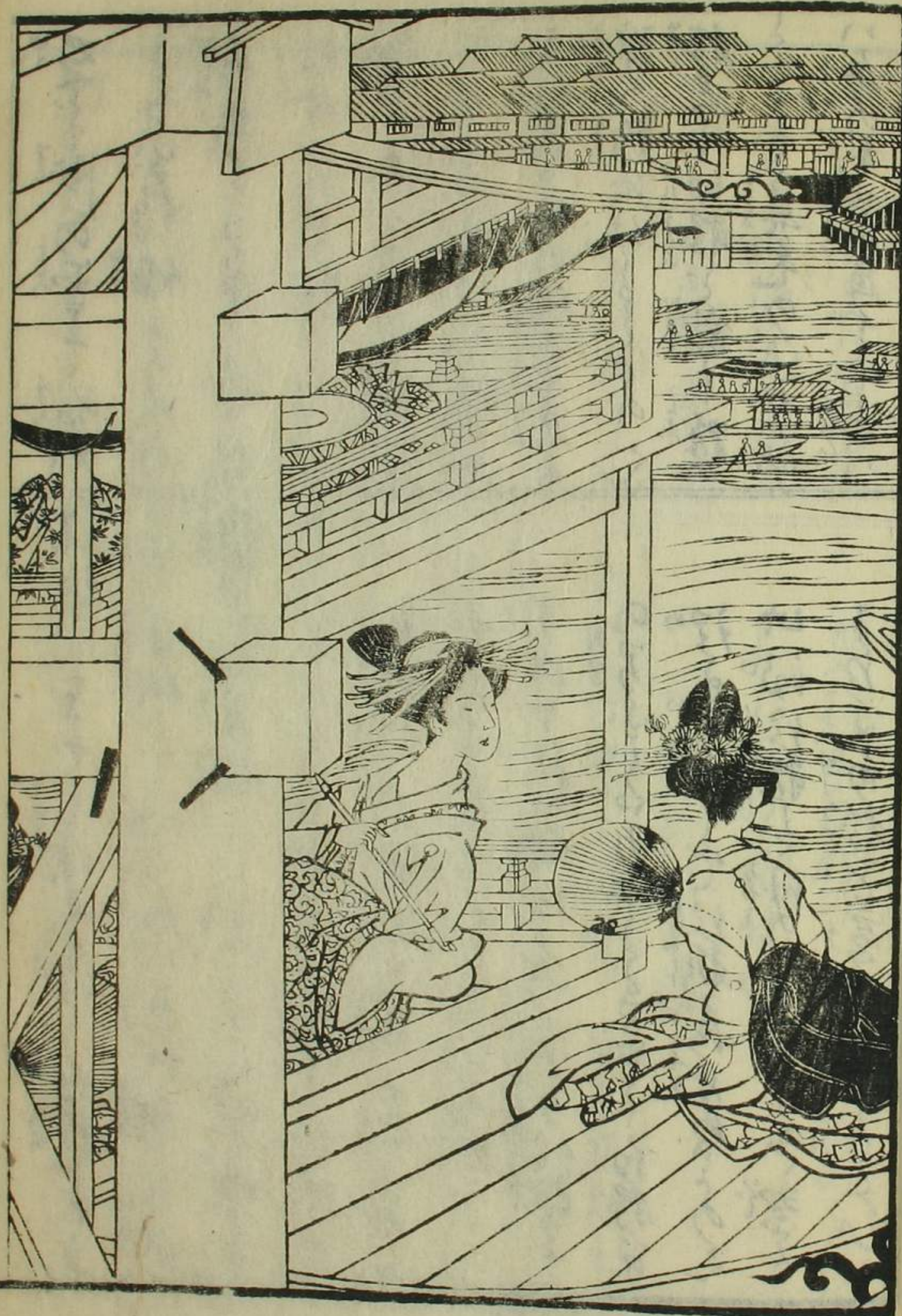
此部は身嗜の部を辨するに
 身嗜の部を辨するに
 身嗜の部を辨するに

女の身嗜の部を辨するに
 身嗜の部を辨するに
 身嗜の部を辨するに

湯化糖の糖
 湯化糖の糖
 湯化糖の糖



身嗜の部を辨するに
 身嗜の部を辨するに
 身嗜の部を辨するに





精神し沁るるにが身考

とを考まわめふべきこと

○花の葉は枯

ひ青まゝのいはれは

ふけしはさうりやめれ

ば老成とせし書いとせ

とめはゆふ一教のたむ

とつ中ん

○花の葉はさうりや

いづのふ

ひ香はつらららんはま

マツの

龍腦

二文

右移して湯はうひにしるるに

等かよ合と湯さうりや

しをまゝさうりや

一取まゝはれ入さうり

○はまは相のゆ

あつしはれまゝはれ

○身は汗のゆ

まうり 防風

右移して湯はうひにしるるに

等かよ合と湯さうりや

○又法

うろごめ 糶米 ついに

移して湯はうひにしるるに

汗は

け法は

かしも汗

月ひが汗

○衣は汗

洗する湯の中へ

そけを入帷



はあちと入る
あゆとさうり
とりとさうり

はあちと入る
あゆとさうり
とりとさうり

かのでは

入つて

いれ

中り

ふらけ

